

平成25年(2013)2月1日

編集・発行
書学書道史学会
会報委員会

〒166-8531 東京都杉並区
3-30-22 大学生協学会支援
センター内

TEL (03) 5307-1175

FAX (03) 5307-1196

第二十三回 書学書道史学会大会を終えて

荒金 信治

季節はずれの台風を思わせる風雨の中、学会員諸氏におかれましては、初日の開会式より、別府大学へ多数のご参集をいただき、心より御礼申し上げます。また、当日は寒波をとまう九州初の大会となりましたが、大会運営者として地元のおもてなしに意を尽くし、和やかな雰囲気を感じていただきたく努めた次第でございます。



於別府大学・大会発表風景

さて、初日は陳柏儀氏、福光由布氏の研究発表に引きつづき、中国からお招きした胡平生先生(簡牘研究者・中国文化遺産研究所研究員)による講演会が行われました。「簡牘の偽物問題について」と題し、近年発掘された簡牘の真偽について、実体験に基づいた解説と見方等が明快に語られました。今回の胡平生先生の講演により、これまでの簡牘文字に新たな

視点があてられ、とりわけ有意義な講演となりました。

講演会が終了した後、当地温泉地帯にある「ホテル鉄輪(かんなわ)」に移動し、懇親会が開催されました。ここで、地元大分の食材を活かした品々を堪能していただきました。また、参加された会員はもとより、大分の書学関係者の方々の懇親を大いに深める貴重な時間となりました。

2日目の発表は、川合尚子氏・緑川明憲氏・丸山果織氏・尾川明穂氏・矢野千載氏・高木義隆氏・横田恭三氏とつづき、日頃の研究成果をうかがう機会を得ました。いずれの発表も、「書」に関する様々な事項を多角的な視点からアプローチされたものでした。これらの発表成果に対し、参加者からは真摯な姿勢で質問や問題提起がなされました。とりわけ今大会では、発表者のみならず、また聴衆者も、書学の大切さとその深遠さを共有できたものと感じました。

一方、大会両日にわたり、研究ならびに教材用に収集した、自前の拓本類で特別鑑賞会を本学第2体育館において開催しました。時代順に配した200点余の原拓、石片、甲骨文字等の展示に対して、参加者全員が一点一点を熱心に鑑賞されました。また、近現代作家の作品も展示し、書の歴史を体感できるように努めました。また、大方好評を博していただきました。

また、特別展の企画の中で、中国からもう一人お招きした呉昌碩の曾孫にあたる呉越先生(呉昌碩記念館執行館長)による「水墨画実演」と「呉昌碩印鑑賞解説」が開催されました。呉越先生の水墨画で引く線は、呉昌碩から受け継がれた筆法であり、大胆かつ繊細なその線から生まれる作品は、生命感に溢れていました。さらに呉昌碩作愛用の「印」をもご持参の上、その場で公開され、解説していただきました。参加者一同、門外不出の本物の「印」を目のあたりにし、感銘というお土産をお持ち帰りいただきました。(大会運営委員長)

去る6月24日(日)、日本大学文理学部において、「第8回学生・若手の会員による研究発表会」が開催された。

陳建志氏(筑波大院・博士後期2年)による「趙孟頫の小楷の真偽について」(快雪時晴帖) 跋を手がかりに」と野中直之氏(大東大院・博士後期1年)による「藤原定実筆『古今和歌集』仮名序にみる表現の主体」の意欲的な二発表に対し、48名が参加した。

後半の意見交換会では、金子馨氏(日大)、鍋倉翔織氏(大東大院)の2名による基調報告につき、これから斯学の研究者を目指す若手、ならびに学生たちが日ごろ感じている諸問題や悩みを、現場の実情などについて有意義な意見交換がおこなわれた。研究の方法論はもとより、世代間・分野間における研究環境の相違について、いくつかの課題が、まず共有できたことは、大きな成果であった。

先着順×切、早めの申込を!

第9回 会員のための鑑賞セミナーのご案内 国内局

第9回となる「会員のための鑑賞セミナー」を以下の要領で開催します。奮ってご参加下さい。日時：平成25年3月17日(日)14時〜16時 場所：泉屋博古館(左京区鹿ヶ谷下宮ノ前町24)

集合：京都泉屋博古館内講堂に午後2時集合。なお、入館する際には、各自、入館料をお支払いください。内容：博古館所蔵の八大人(安晩帖)、許友包世臣の作品や(寸松庵色紙)、(石山切)など、日中の名品を特別鑑賞します。詳細リストについては、学会ホームページに掲載予定。その他、企画展と常設展をあわせて鑑賞し、当日は博古館学芸員による住友コレクションの概要レクチャーもあります。また、見学後、懇親会を予定(自由参加)しています。

所属・氏名・連絡先を明記の上、メールアドレス:yokota@atomi.ac.jp ファックス:048(478)3393 (文学部人文学科研究室) 田恭三宛にお送りください。



京都泉屋博古館入口

京都市バス
(5)(93)(203)(204)系統「東天王町」下車、東へ200m角
(32)(100)系統「宮ノ前町」下車すぐ
JR・新幹線・近鉄電車 京都駅より
(5)(100)系統
阪急電車 河原町駅より
(5)(203)(32)系統
京阪電車 三条駅より
(5)系統
地下鉄烏丸線 丸太町駅より
(93)(204)系統

募集：先着順にて、25名定員で締切ります。申込：本会報が到着した日から、2月末日まで。ただし、定員に達し次第締切ります。手続：件名を「鑑賞セミナー申し込み」として、

〈申込先〉

跡見学園女子大学(横田恭三宛)
メールアドレス:yokota@atomi.ac.jp
ファックス:048(478)3393
(文学部人文学科研究室)



京都泉屋博古館付近



於日本大学・研究発表風景

「第9回 学生・若手の会員による研究発表会」発表者公募について

国内局

「主として学生・若手の会員に発表の場を与え、研究の活性化と研究者の育成を図る」という目的で開催(第8回は日本大学で実施)している研究発表会の発表者を、以下のとおり公募します。

発表の後、座談会形式で参加者相互に書めぐつて意見交換の場を設けます。

日時：平成25年6月23日(日) 13時〜17時

会場：大阪教育大学天王寺キャンパス西館

内容：①若手研究発表 2名〜3名(公募)

②座談会形式の意見交換会

「あなた(私)にとつての書の魅力」

※書き手の立場、見る立場、教える立場、いろいろな立場から書の魅力を探り、これからの書芸術・書教育を考える意見交換の場にします。

①若手研究発表者の公募について

公募対象：満35歳以下、または大学院在籍者に

限ります。

発表時間：1人20分、質疑応答10分、合計30分

を持ち時間とします。また、パワーポイントなどの機器使用可。

締め切り：平成25年3月15日(金)

応募方法：電子メールにて、件名を「研究発表の

応募」とし、住所・氏名・所属を明記

の上、発表内容の題目と要約(レジュ

メ)をワード文書で添付して下さい。

文字数は500〜600字とします。

メールアドレス：跡見学園女子大学(横田恭三宛)

yokota@atomi.ac.jp

日中国交正常化四十周年にあたる本年の活動報告

国際局

会報21号に記した通り、国際局は平成22年度から「情報発信の推進」と「海外研究者の招聘」を二つの柱としている。特に後者は「今後予算の範囲内で海外の研究者を本学会で招聘する方向で進める」ことになり、平成22年度からスタートする予定であったが、既に報告したように、三

・一一大震災のため林業強先生(香港中文大学

博物館館長の東京国立博物館での講演を断

念した。さらに日本全体が「復興祈願」という社

会趨勢では、平成23年度はどなたもお招きしえ

なかつた。

しかし、平成24年度は国内局の絶大なる協力を得、大会プログラムの一つとして、初めて「海外研究者の招聘」が実現した。二年越しの講演のスタートである。それは胡平生先生(中国文化遺産

研究院研究員の講演会「簡牘の偽物問題(原題：簡帛辨偽)」である。簡牘帛書に関する最先端の研究報告であり、数多くの簡帛を調査され真偽の鑑定に東奔西走される、斯界の牽引車ならではの「高説であった。

また呉昌碩の曾孫である呉越氏(上海呉昌碩

記念館執行館長)が来日され、水墨画実演鑑賞

と呉昌碩印三顆

過眼の機会を与

えて下さった。

日中国交正常

化四十周年にあ

たる本年、両国の

歴史認識の相違

により多くの文



呉越氏実演風景

一方の「情報発信の推進」は、残念ながら足踏み状態にある。学会のホームページは主に国内外軌道に乗り始めており、これからは主に国内外で開催される国際会議をクローズアップしていきたいと考えている。会員各位からの情報提供をこの場を借りて切にお願い申し上げます。

提供先

メールアドレス：kawachi@ic.daito.ac.jp

(大東文化大学河内利治宛)

ファックス：03(5369)73882

(文学部書道学科事務室宛)

昨春秋の大東文化大学での第22回大会で、学会誌に関する投稿規定と執筆要領の見直しについて臨時理事会で検討しました。そこで決定された新たな投稿規定と執筆要領は、すでに学会のホームページに掲げられています。「書学書道史研究第22号」は、この新たな投稿規定と執筆要領にもとづく投稿論文に対して、査読を行い、採用された論文8編と研究ノート1編を中心に編集

したものです。

この第22号は、8編の論文と1編の研究のノートに加えて、橋本貴朗・下田章平・押木秀樹の三先生ご執筆による全15ページにわたる詳細な「会員研究動向」を含め、これまでになく全150ページという分厚いものとなりました。査読に当たられた先生方をはじめ、種々ご協力をいただいた先生方に御礼申し上げます。



また、この第22号からは、学会の事務局移転とも連動して、印刷業者についても新たな業者をお願いすることになりました。表紙の体裁や色彩などの全体のイメージは変更せず、図版の鮮明度を増すため

に、すこしツヤのある紙質に変えた程度ですが、コストについては、これまでの半額近くにおさえることが出来ました。

これまでと違って最初から最後まで編集局が直接業者と対応することになったため、スムーズに運ばない点も多々ありましたが、今回の編集で一度経験しましたので、次号からはより効率的な編集ができるものと考えています。次号以降の編集業務についても、今回の業者に継続してお願いする予定です。

学会誌に関するご意見、あるいは編集局の仕事に関するご要望等がありましたら、直接中村宛に書信、メール等でお願ひ致します。

J-STAGEについて

学術局

平成24年度特定領域研究促進助成金応募計画書の採択結果

研究局

学会ホームページでお知らせしていませんとおり、昨秋、独立行政法人科学技術振興機構(JST)運営のJ-STAGE(ジェイ・ステージ)で学会誌『書学書道史研究』21号が公開されました。ようやく学会誌刊

行から一年後に順次公開という軌道に乗りましたので、今後もスケジュールどおりに進めるとともに、その利便性向上も図ってまいります。

本年度一件の応募があり、所定の審査規程に従い、複数の審査員にの審査結果、採択となりました。

▽応募領域
近現代書道史・近現代書学
▽研究課題名
同風印社『印』総目録化
▽申請者名(研究代表者名)
権田瞬一

平成25年度特定領域研究促進助成金応募計画書の募集

研究局

特定領域研究促進助成金制度は、研究局が研究促進及び研究基礎整備の必要性が特に求められる領域を特定し、会員を対象に当該領域の研究計画を募集し、応募のあった研究計画から優れた成果又は有用な成果が期待できる計画を選定したうえで、研究推進助成金を支給し、翌年

に成果の提出を義務づけ、当該領域の研究促進と斯学の振興に寄与しようとするものです。成果は論文に限りません。資料集やデータベース等も可能です。

ださい。もとより学生会員の応募も可能です。揮つてご応募ください。特定領域は過年度と同様、「近現代書道史・近現代書学」と「新出土資料」の二領域で、申請受付期間は、平成25年6月1日(土)～6月3日(月)です。

掲載しましたので、同制度の規程と併せてご覧

ください。

平成25年度の募集要項を学会ホームページに

点視

書跡文化財はどの地域で保存すべきか

安達 直哉

最近特に書跡を含めた文化財の諸外国との間の移動が頻繁になってきた。展覧会にともなう一時的な移動のほかに、返還や売却などにもなう移動も増加してきている。世界的にみると、文化財を産出した国々が現在の保有国に対して返還を求め動きが増している。わが国に

対しても韓国からの返還要求は厳しく、一昨年には宮内庁の『朝鮮王室儀軌』一六七冊等が引き渡された。しかし、韓国からの要求はまだ続いており、公共機関のみでなく、私立の機関に対してもあり、大倉集古館所蔵の利川の五重石塔などが対象になっている。また、さまざまなオークションで日本にあった中国の作品などが高値で中国人に購入されることも多い。さらに私立博物館の質の高い中国の書が購入されて中国に戻ったという話も聞かえてくる。このような状況下、書跡を含む文化財は一体どこにあればよいのかと考えざるをえない。

国内でも東京と地方の間で同種の問題が存する。埋蔵文化財に関しては別に考察するとして、書跡でいえば、今から八年前に注目される論争があった。それは国宝の『古今集二十(高野切)』二巻を高知県が旧大名家山内氏から購入するか否かで主に県内で論議となったことである。その時までには、山内氏が東京に在住していたためかなり長期間東京国立博物館に寄託されていた。国への売却交渉もあつたというが、その時点では国はすぐには無理であるが、何年か先には購入する可能性を示していた。一方高知県は、すでに平成七年から十五年まで約一万点以上のものを売却や寄贈によって入手していた。このような中で県議会をはじめ県民の間で賛否の議論が沸騰したのである。

ある。

そこでの賛成派の論拠は以下の通りであった。①藩主一族が代々受け継いできた資料である。②『古今集』は『土佐日記』『土佐日記』で知られる紀貫之が編者であり、高知県と縁がある。③同時に他の山内家資料が寄贈される可能性が大きい。④翌年NHK大河ドラマ「功名が辻」が放映されるので、観光の目玉と期待されるというものであった。

逆に反対派が主張した点は次の通りであった。①この写本が高知県にどこまで縁があるのか、山内家は明治維新以来東京に在住している。②県が購入しなくても国が購入するであろうから、散逸する恐れがない。③県立博物館もない現状から考えて県の管理体制が不十分である。④県財政に大きな負担となる。

結局は、当時の橋本知事の英断で高知県が七億円で購入し、同時に約三万六千点の資料の寄贈があつた。しかしながら、観光の目玉としてはあまり役立たず、県立の博物館も建設されていない現状では今でも購入しなかつた方がよかつたという意見が聞かれる。

さて、これらの問題を考える際に指標としたいのは、(一)保存に適した環境(温湿度管理や防犯・防火対策がよりよい)、(二)コレクションであれば一括性、(三)作品の歴史性(書跡の中でも石碑や扁額、古文書などは特に場との一体性が強い)、(四)多くの人々が観覧できる、(五)大災害への備えという点である。この事例でいえば、高知県に全く適した施設がないわけでもないことを前提として、(二)の点を最も重視したい。何百年と旧大名家に伝来した資料をばらしたくないので、高知県にあるのがよりよいと考える。さて、これらの問題に対してどう判断すればよいのか諸氏の御意見を広く聞きたいものである。

山田正平五十年忌に寄せて

神野 雄二

本年二〇一二年は、山田正平没後五十年に当たっている。記念の展覧会が東京の鳩居堂画廊で、一月二三日から二八日まで開催された。遺作展は、正平没後、山田家の皆様また正平を慕う多くの人たちにより、これまで数回に亘って開催されてきた。その中心となっていたのが小木太法先生であった。残念ながら小木先生は本年一〇月二七日亡くなられた。ご冥福を祈りたい。小木先生は、東京学芸大学時代からの恩師であり、遺作展、作品集の刊行、シンポジウムなど正平の顕彰の度にお声をかけてくださった。

山田正平（一八九九〜一九六二）は、日本の篆刻の祖「印聖」と称される高芙蓉の系譜に連なる。古来「詩書画」三絶の文人活動は、文人必須の条件として詩・書・画に加えて篆刻を取り上げている。正平自身四絶の芸術境を目指し、篆刻芸術に命を賭した。正平の成し遂げた類い稀な功績を考えるに、わが国における「印仙」と称してもよいのではと思う。

さて、日本における印学の研究、印章や篆刻そして印人や印譜の、広い視野に立った体系的な研究はまだ十分なされていないと言えない。

私の研究は、日本の印章や篆刻の歴史的、文化史的な解明を目的としており、総括的には日本の印学の体系化を目指したい。これは書学・書道史の対象としてだけでなく、美学・美術史、歴史考古学、文化史等その裨益するところは甚だ大きいと思われる。

二〇〇九年から五年間の計画で、科学研究費補助金の助成を受け「基盤研究(C)「日本の篆刻に関する基礎的研究」とのテーマで、研究に従事して

いる。

これまで、日本や中国における印章や印人に興味を持ち、それへの史的考察や作品研究をテーマに据え論考を発表してきた。日本の印人の研究、主として高芙蓉（一七二二〜一七八四）研究、並びに彼を祖とする芙蓉派の一系譜と目される、源惟良、小俣蟬庵、福井端隱、山田寒山、山田正平等の事績の調査・研究と作品分析、そして印学の継承とその発展を探ることを問題としてきた。また、わが国の印人伝における唯一の専著と言える中井敬所の『日本印人伝』を、さまざまな文献・資料より拾遺し補訂すること課題としている。篆刻の専家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究も併せて進めている。

私は、記念として、「山田正平研究―周辺の人々とその交友(Ⅲ)―」(『国語国文研究と教育』第五〇号、熊本大学教育学部国文学会、二〇一二年二月)を執筆した。これは山田正平の令夫人喜美子様とご令嬢梅枝様に昭和五三年と五四年、二回に亘りインタビューを試みたが、それを纏めたものである。正平の日常の姿が髣髴とされるものであった。

思えば、恩師今井凌雪先生は、昨年二〇一一年七月二六日に亡くなられた。先生は、正平を团长とした第三次訪中日本書道団の団員として中国に行かれており、正平を敬慕していた。先生は、正平に自用印を刻してほしかったが、先生が中国から帰られて直ぐにお亡くなりになり残念であった、と語られた。また、正平の印を持っているが、その線は、指が切れるかと思うくらい鋭いもので、真似て真似られるものでない、とも語られた。

学生時代からのお二人の恩師を相次いで亡くし残念でならない。お二人は、筆と刀とペンを持って書と格闘された。私も、微力ながらその志を継ぎ、ご恩に幾分かでも報いたく念願している。

平成23年度 会計決算報告書		
	項目	決算額
収入部	個人会員会費	2,354,000
	団体賛助会費	600,000
	その他の収入	585,783
	前年度繰越金	4,075,736
	合計	7,615,519
支出部の	編集局係費	989,729
	国際局経費	315
	国内局経費	230,855
	学術局経費	50,000
	研究局経費	0
	《会報》編集委経費	0
	ホームページ委経費	105,315
	事務局経費	
	謝金手当	0
	会議費	2,913
	荷造送料	469,120
	遠隔地交通費	363,580
	普及広報費	0
	印刷費	219,771
	通信費	29,100
	事務消耗品費	15,854
	事務委託費	360,000
	人件費	140,760
	諸学会費	2,000
選管費	64,110	
予備費／繰越金	4,572,097	
	合計	7,615,519

平成24年度 会計予算報告書		
	項目	予算額
収入部	個人会員会費	2,400,000
	団体賛助会費	100,000
	その他の収入	300,000
	前年度繰越金	4,572,097
	合計	7,372,097
支出部の	編集局係費	600,000
	国際局経費	300,000
	国内局経費	600,000
	学術局経費	200,000
	研究局経費	500,000
	《会報》編集委経費	200,000
	ホームページ委経費	200,000
	事務局経費	
	謝金手当	200,000
	会議費	300,000
	荷造送料	400,000
	交通費	400,000
	普及広報費	100,000
	印刷費	200,000
	通信費	10,000
	事務消耗品費	10,000
	事務委託費	700,000
	人件費	100,000
	諸学会費	10,000
選管費	0	
予備費／繰越金	2,342,097	
	合計	7,372,097

平成24年11月17・18の両日、別府大学・別府キャンパス32号館C8教室で開催された第23回大会の初日冒頭、例年通り本年度総会が開催された。

総会は、信廣友江理事の司会で、まず横田恭三国内局長の開催の辞、豊田寛三・別府大学長による開催大学代表挨拶、澤田雅弘副理事長（理事長代理）の挨拶に続き、萩信雄諮問委員を議長に選出して議事に入り、以下の議事及び報告がなされた。なお、議事については、いずれも満場一致で可決された。

（議事）

- ▽23年決算事業報告案（鈴木晴彦事務局長）
- ▽23年決算案監査報告（杉浦妙子監事）
- ▽24年予算事業計画案（鈴木晴彦事務局長）
- ▽会則の一部改正案（笠嶋忠幸副国内局長）
- （報告）
- ▽編集局報告（森岡隆学術局長・代理）
- ▽学術局報告（森岡隆学術局長）
- ▽国際局報告（河内利治国際局長）
- ▽国内局報告（横田恭三国内局長）
- ▽研究局報告（澤田雅弘研究局長）
- ▽会報委員会報告（高城弘一会報委員長）
- （連絡）
- ▽大会日程等説明（荒金信治開催大学担当）
- ▽事務連絡（鈴木晴彦事務局長）

赤羽豊展覧を鑑賞して

高迫 英嗣

昨年十一月から十二月下旬にかけて、成田山書道美術館で「生誕百年・赤羽雲庭」展が開催されました。ご覧になられた会員の方も多いと思います。

有名な「潭殿」や「暮山魏峨」をはじめ蘇東坡や墨跡風の作など、広大なフロアに展示された約一五〇点の作品群が発する独特の墨気は、今なお私の心を捉えて離しません。中でもひととき印象的だったのが、一九三四年作の「出師表」です。他作に比べてやや地味ですが、「集字聖教序」と見紛う程の技量を示したこの作、驚いたことに制作年がなんと二十二歳。これまで今ひとつ理解できなかった、羲之を書かせたら雲庭の右に出る者はいない、という当時の逸話が、本作を見てようやく理解出来た気がしました。そして何より、実物に接することがいかに大切かを本展を通して再確認しました。

彼の地に収蔵する趙孟頫の法帖

陳 建忠

今年のゴールデンウィークに、韓国国立中央図書館へ行き、そこに所蔵する趙孟頫の法帖を調査してきました。それは石具成氏の博士論文『趙子昂書法東伝及朝鮮松雪体研究』(中央民族大学、二〇〇〇)がきっかけでした。

石氏の論文によれば、韓国における趙孟頫書法の受容は法帖によるところが大きいと理解できます。氏の研究は、この領域において基礎となるものですが、個々の法帖

帖に関しては未だ調査の余地があると言え、これら一群の法帖の流伝史や、真偽、優劣等の問題解明に、力を注ぐ必要性を感じました。

この度のフィールド調査では、韓国所在の趙孟頫法帖を窺見するという所期の目的を達成しました。集趙字書法帖や小楷「大雨賦」等は、管見の限り、未だ提起されていない新資料であり、今後、稿を改めて紹介したいと思えます。

書は人なり

根本 知

畠山記念館にて、秋季展「利休と織部」茶人たちの好みと見立て(二〇一二年十月六日―十二月十六日)が開催された。利休と織部ゆかりの品を中心に、二人が求めた美のかたちを改めて考えさせてくれる素晴らしい展覧会であった。茶道具の良さは勿論のこと、中でも書状における両者の書きぶりの違いが大変興味深いものであった。利休の書は、行間や文字の大きさが整い、謹直な書きぶりである。一方、織部は行が左へ傾き、字形も非常に省略されたもので、連綿も少ない。かぶきの書と称されるほど個性的なものである。「書は人なり」といわれるが、まさに両者の性格をよく表しているといえよう。

書は歴史上、和歌や茶の湯など、様々な分野と共に育まれてきた。書は筆法のみならず、その書かしたためられた背景にも目を向けることで、一層深みある鑑賞に繋がると思われる。この度の展覧会は、書道学の重要性および課題を再認識させられるものであった。

研究のリレー

柳田 さやか

研究は学際的であるべきだといわれます。また、書道史研究に美術史学的方法を取り入れるべきだともいわれます。現在は研究が積み重なり、それを見直せる時代となり、方法論自体を問うことも行われるようになってきました。

研究というのはリレーの性質を持つっており、それぞれの時代にしかできない仕事があることあります。私はこれまで、日本近代において「美術」と非「美術」との境界にあつた書を考察してきました。今年是小杉楳郵著『大日本美術史』を通して、美術史としての書道史に注目しました。日本近代は今後研究がさらに進んでいく領域であると思います。若手研究者の一員として、これまでの研究のバトンを引き継いで、これからの研究の一端を担っていかれたらと考えています。

新入会員

※平成24年5月から同年11月まで

一般会員

- 大森 アユミ 長崎大学非常勤講師
- 安 裕明 茨城大学非常勤講師
- 青木 豊 大東文化大学院
- 浅野 泰之 大東文化大学院
- 天野 太輔 筑波大学院
- 入山 征弘 大東文化大学院
- 上原 澄香 大東文化大学院
- 大嶋 英里 大東文化大学院
- 塩島 敏子 大東文化大学院
- 中村 亜由視 大東文化大学院

- 益山 浩子 大東文化大学院
- 吉田 修 大東文化大学院
- 栗 躍崇 大東文化大学院

編集後記

◆新春、上野の山は王羲之に染まります。山の上の東京国立博物館では特別展「書聖 王羲之」(1・22〜3・3)が開催され、麓にある勤務先の台東区立書道博物館では不折が学んだ、書聖王羲之と題して恒例企画「みんなが見たい優品展」(1・10〜3・3)を開催中。桜の時期を前に書の名花で彩られた上野を訪れてみてはいかがでしょうか。(六人部)

◆関東地方では七年ぶりの大雪を記録し、災害に弱い街であることと共に、雪国の大変さを痛感しました。さて、今回版組を仰せつかりました。不出来なところもあると思いますが、今後ともよろしくお願ひします。(金子)

◆周知のとおり、インターネットの発達には目を見張るものがある。それにとともに、移動せずに、書跡資料を収集する事情も変化してきている。かつては、古美術商や古書肆などから送付された目録のモノクロ図版を、あるいは活字をもとに選別し、発注するのが主であった。現在では、ホームページに掲載された鮮明なデジタル画像複数から判断することができ、オンラインショッピングによって、珍品・稀観品を、比較的廉価で入手することも可能である。そのためには、やはりアシナを張り巡らさなければならぬのだが、それは、今も昔も変わることはないであろう。(高城)